

宮崎汎会員が見た世界の旅第3部歴史編第13話

狂気の果て・アウシュビッツ ポーランド

間もなく8月15日終戦記念日がやってくる。終戦から数えすでに77年も過ぎた。全世界が平和を願っているはずだが戦乱の止む気配はない。大国ロシアはウクライナへの軍事侵攻を今も続け殺戮を繰り返している。この瞬間にも戦争で命を失っている人がいると思うとやりきれなく何もできないことに虚しさを感じる

かつて長崎や広島を訪れ原爆の恐怖を記念館の写真や遺品を見て知った。沖縄のひめゆりの塔や摩文仁の丘など辛い戦跡巡りもした。

1968年初めて常夏のハワイを訪れ、真珠湾に沈む戦艦アリゾナへ行った。日本人を見る視線は厳しかった。小声でジャップという蔑みの声を耳にして、憧れの島ハワイに浮かれていた気分は、一瞬にしてしぼみ逃げるようにしてそこを離れた。

戦争の記憶を呼び覚ますものには二つのパターンがある。一つは戦勝を記念するものである。

二つ目はノーモアや、ドント・リメンバーといった戦争は狂気だ、無意味だ、もう沢山だと人間の心に強く訴えかけてくるものである。その極めつけの例はアウシュビッツやベトナムに見ることができる。



アウシュビッツの入口”働けば自由になれる“

ナチの残虐を知らしめるアウシュビッツ（ポーランド語ではオシビエńczyム）は、負の世界遺産に指定され人類の愚行に警鐘を鳴らし続けている。

世界各国から老いも若きも多くの人達が訪れ息を殺して見学している。有名な「働けば自由になれる」と記された入り口の遮断機をくぐると、そこはゾクリと鳥肌立つ不気味な別世界である。見学者は途

端に無口になる。恐怖をおおるような高圧電流が流れていた有刺鉄線に囲まれた広い敷地は、忠実に当時の面影を今に伝えてくれている。

道路際に太い柱に支えられた鉄棒のようなものがある。歩き疲れて柱に背を持たせかけた、そこは見せしめに首をくくられた人々が吊るされていた柱だと告げられ思わず飛びすぎる。



身の毛のよだつ犠牲者の靴の山

28棟ある建屋のいくつかに入る。眼鏡の山、靴やカバンの山その数は尋常な数ではない。死者の怨霊が冷気となって伝わり身を震わす。恐怖の頂点は毛髪の山である。二教室分もあろうかと思われる広い部屋にうっそうとある灰色一色の人間の髪の毛の山また山である、毒ガスで一様に変色してしまったそうだ。この想像を絶する分量の髪の毛は一体何万人の犠牲者のものであろうか。此の髪の毛を毛布に仕立て利用していたというから一層恐ろしく身が震える。

次に案内されたところは天井に小さな穴がいくつか空いているコンクリートのガランとした小ホールである。なんの変哲もない部屋なので外に出ようとすると、ガイドはここが悪名高いガス室だと告げる。天井の小さな穴は毒ガスを発生するチクロンの缶を投げこむ穴だと知らされ思わず息をつめる。



毒ガス室



フル稼働した人間焼却炉

次は赤レンガの人間焼却炉室だ。煉瓦は熱で黒くすすけている。ここは静寂だけが支配する世界だ。色とりどりの花が供えられ人々がひしめき合っただけの混雑ぶりだが声を出す人はいない。

3km先にあるビルケナウ強制収容所も見学できた。広大な敷地に赤さびた鉄道線路が一筋引き込



最終キャンプビルケナウ

まれている。当時ナチによって牛馬以下の扱いで各地から送られてきたユダヤの人々の文字通りの終着駅である。保線工が二人遠くにポツンと見える。決して再び列車が走ることのない線路の保守をしている。此の忌まわしい歴史の一頁を、永久に子孫に教訓として伝えるための作業であろう。



ベトナムの戦争博物館

東洋にも戦争の恐ろしさを伝える博物館がある。ベトナムのホーチミン市（旧サイゴン市）を訪れる人たちが案内される「戦争博物館」である。兵器弾薬の類にはさして驚きもしなかったが、南国の暑い最中に震えが止まらなかったのは、枯葉剤などの影響で恐ろしい姿で生まれてきた奇形児のホルマリン付けの大きなビンの数々が展示してある部屋である。目に入った瞬間ウアーと思わず悲鳴を上げ外のまぶしい太陽の下に飛び出した。大きく息を吸い込んだが心身共に脱力感でぐったりとなった。

「戦争」許すまじきである。

いつの時代も、人間が渴望してやまない戦争のない平和な世界は何としても実現したいものであるが・・・どうしたらいいのだろうか・・・自問自答してみたが答えが出てこない。